

日本の幻ノ滝 第6回

菅平 米子不動
権現滝

写真・文 志水哲也

長野県須坂市を流れる米子川の上流部、根子岳北面2キロに及ぶ爆裂火口壁にかかる米子不動の瀑布群は、近年、アイスクライミングの対象として紹介されている。冬期、信州内陸部の冷え込みは厳しく、空気も山も川も一切が凍りつく、無音の世界が始まり、無数のツララが巨大な氷のオブジェとなって現れる。

米子不動 権現滝

Profile

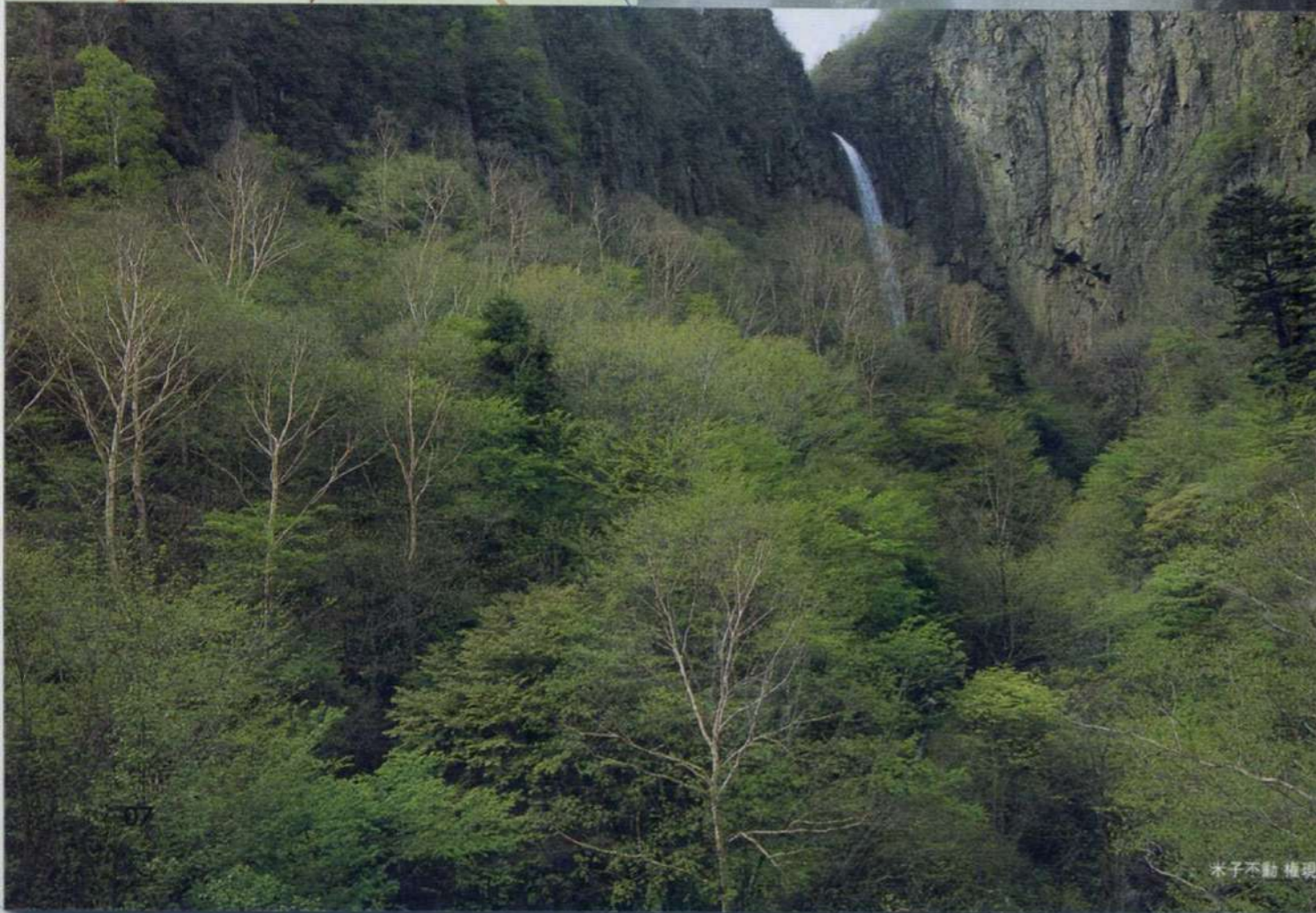
志水哲也 (写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登攀、長期縦走を行う。1997年に黒部深谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と渓谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島を取材している。
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、立山、黒部、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



米子不動 不動



米子不動 植視



旅する心

生まれ育った横浜から、黒部の玄関口・宇奈月に移り住んでちょうど10年が経った。
移住した数年後に写真家を志し、黒部を夢中で撮り、写真集や写真展で発表してきた。
このまま撮り続けることに限界を感じたのは3年前だ。「日本の幻ノ滝」というテーマで知床から屋久島までの旅に出た。そこで多くのカメラマン、画家、ナチュラルリスト、登山ガイドらと出会い、自分が何をしたいのかを、あらためて考えるよい機会となった。
移り住んだことで、明らかに表現が弱くなるカメラマンもいる。住むこと、そこに定着することで目的が終わってしまうのだろうか。

表現者は、永遠の旅人でなくてはならないのだろうか。
いずれは、黒部を中心に、日本の溪谷や自然をいろいろな角度から表わしたいと思っているが、そのためにも今はまだ知らない世界を旅したい。
僕はここ数年、登山者としての視点を捨てることで、カメラマンであろうと頑なに思ってきた。しかし、山や自然というフィールドは、そういった形にはめる必要がないほど大きいものだろう。カメラマンであろうとする以前に、一人の登山者、旅人として、登ったり見たりする喜びや、探りたいと思いう心を失うことなく、旅していきたい。

大谷不動 二の滝

黒部 劔沢大滝 D滝

写真文 志水哲也

劔沢大滝は落差の合計134m、大小10の滝で構成される。いちばん上の4m滝を除いて、上流からA滝、S滝と呼ばれるが、20m以上の落差を有するのはI滝・落差48mと、D滝・落差30mの二つだけである。しかし、最下段の一滝へ行くのと、ゴルジュ最奥に落ちるD滝に行くのとでは登攀技術、費やす日数、リスクがまるで違う。



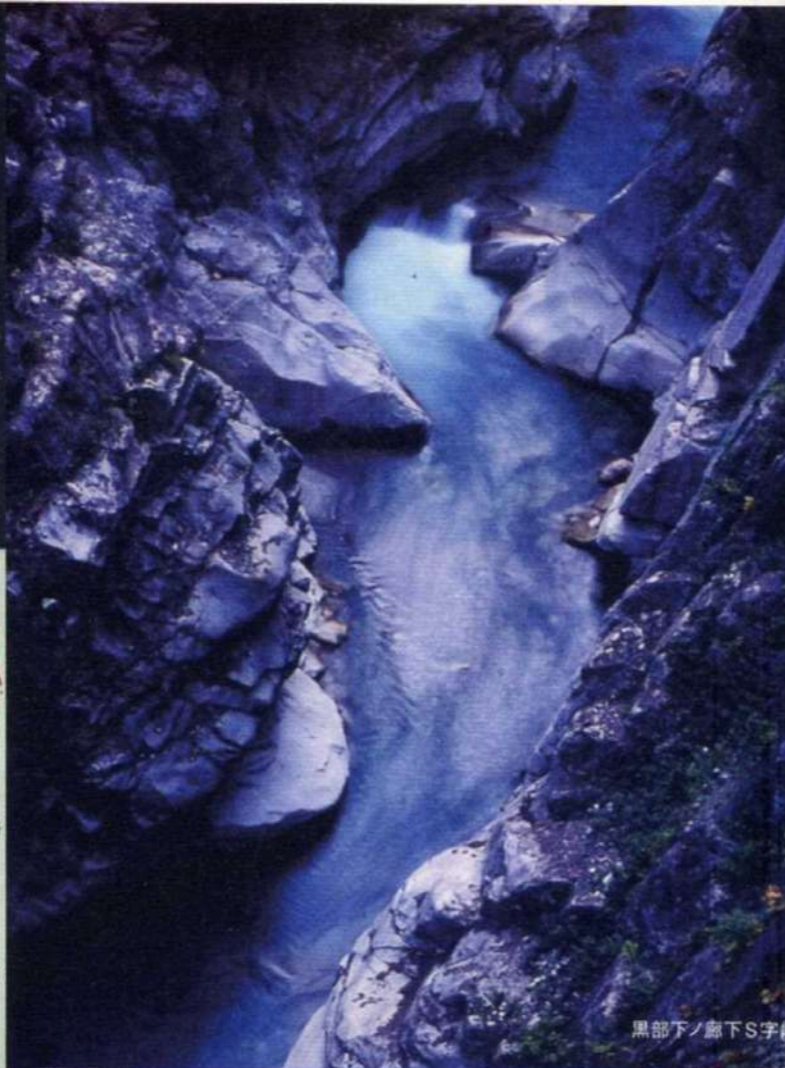
劔沢大滝D滝

Profile

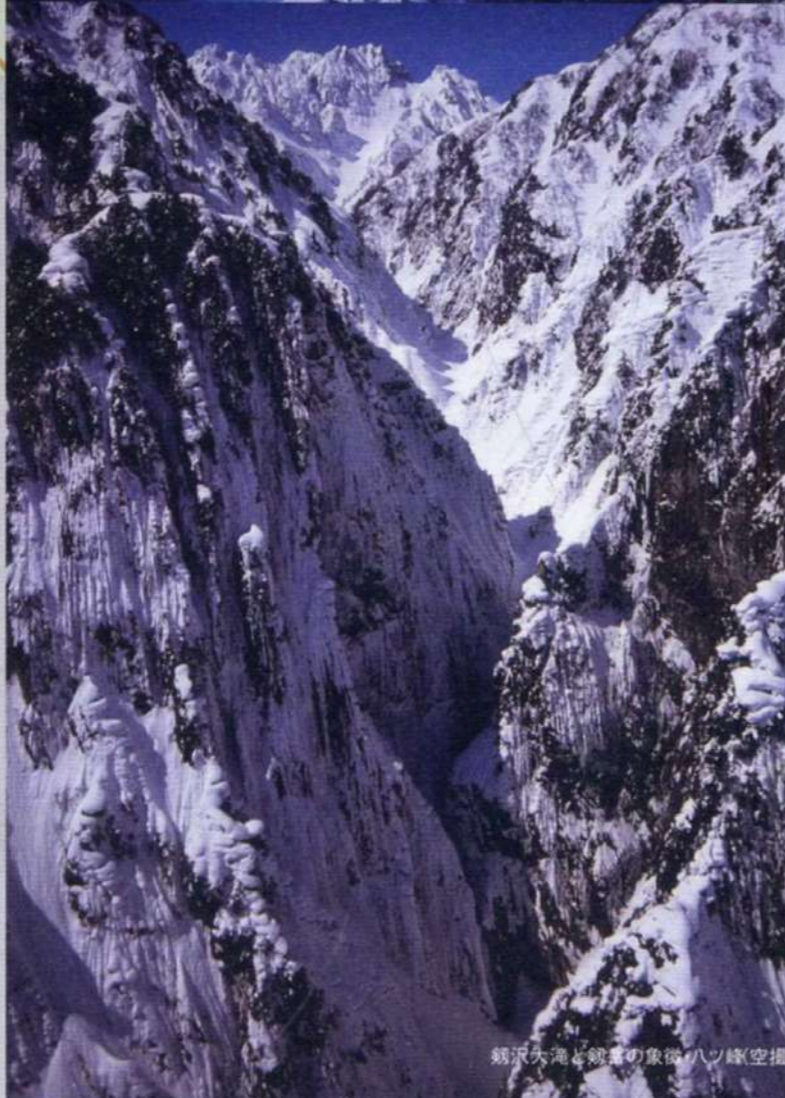
志水哲也(写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登攀、長期縦走を行う。1997年に黒部溪谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と溪谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島取材している。
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、黒部、立山、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



黒部下ノ部下S字



黒部大滝と剣岳の象徴ハツ崖空撮



秘瀑

高度差500mの側壁に挟まれ、一日中日の当たらない間の世界。それが剣沢ゴルジュだ。その最奥に白い水流が扇条に広がり落ちる優美なD滝が姿を見せる。
「この間の主なのかな。なぜそんなに美しい」。ふと、喉元にそんな呟きが湧いてくる。
側壁を登ったり下ったりトラバースしたりして、ようやくたどり着く

のが「緑の台地」。そこからザイルにすがって滝下まで60m降りる。
D滝の滝壺は、凹凸がまるでないくらいまで瀑流に岩肌を磨かれ、巨大な蛸壺のようだった。風と水しぶきが凄まじく、時々、瀑水のなかに雪渓が崩壊した大きな雪塊が混じる。それを喰らったらおしまい、この世のものとは思えない場所、人間が立ち入ってはいけない領域にきてし

まったような空恐ろしさを感じる。青白い光を発した瀑水が、まるで僕を飲み込むように広がり迫ってくる。それは緑の台地から見たスタレ条に落ちる美しい滝とは違い、まったく日が当たらない日影の滝なのに、この迫力は、凜とした雰囲気はなんなのだろう。ここから見上げたD滝の凄みこそ、まさに「幻の滝」の真随であった。

剣沢大滝のゴルジュ

●好評発売中の本とDVD



桂書房刊 A5判上製80頁(オールカラー) 税込1,680円

(2004年1月2日にNHK総合テレビで全国放送された作品)



NHKエンタープライズ刊 55分 税込3,990円

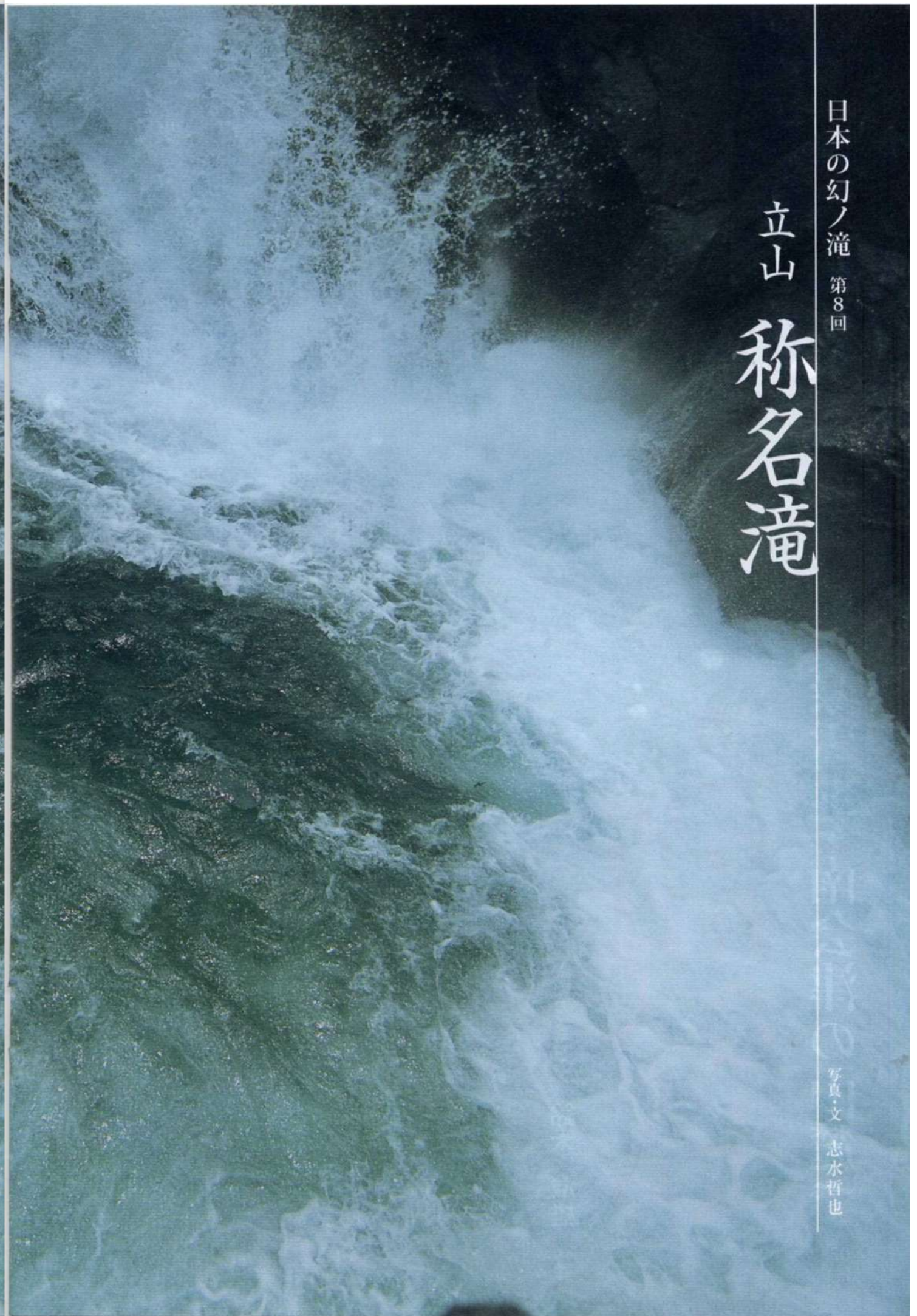
●写真展「日本の幻ノ滝」巡回

- ①モンベルクラブ渋谷店5Fサロン 12月25日(火)夜~1月10日(木)・スライドトークショー 12月25日(火) 18:30 ~ 20:00
- ②モンベルクラブ名古屋店サロン 1月15日(火)夜~27日(日)・スライドトークショー 1月15日(火) 18:30 ~ 20:00
- ③モンベルクラブ南町田グランベリーモール店サロン 2月2日(土)~24日(日)
- ④モンベルクラブ奈良店サロン 2月29日(金)夜~3月30日(日)・スライドトークショー 2月29日(金) 18:30 ~ 20:00
- ⑤モンベルクラブ諏訪店サロン 4月4日(金)夜~5月6日(火)・スライドトークショー 4月4日(金) 18:30 ~ 20:00

問合せ:志水哲也写真事務所 ☎0765-65-2911 fax65-2912
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

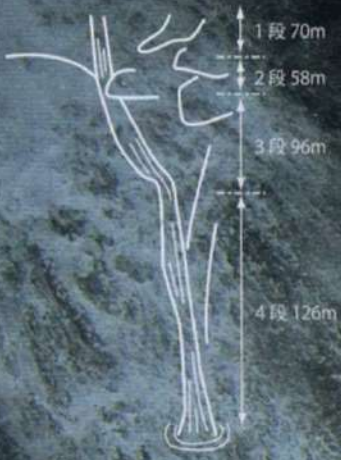
立山 称名滝

写真文 志水哲也



4段350m、日本最大の落差を誇る称名滝は、立山黒部アルペンルートから観覧できるが、その内部には一般に知られていない風景が展開している。岩壁を攀じ、2段目や3段目の滝壺に上がって、天からのしかかってくる瀑水、足下から奈落の底に吸い込まれていく瀑流、波打ち泡立つ滝壺を目の当たりにして息をのんだ。さらには称名滝の上流には称名峡谷が刻まれ、そこを突破した者はいまだいない。

称名滝 4段 350m



称名滝 3段目の滝壺

大台ヶ原 西ノ滝

写真・文 志水哲也

この地方では岩壁のことを高と呼ぶ。多雨の激しい浸食で岩がむき出しになり、山肌に富が出現し、溪谷には巨大滝がかかる。東ノ川上流にかかる西ノ滝はその最たるもの。登山道が付けられていないので、沢登りで見ることができない。



西ノ滝

日本の幻ノ滝

Profile

志水哲也 (写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登攀、長期縦走を行う。1997年に黒部渓谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と渓谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島を取材している。
<http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/>

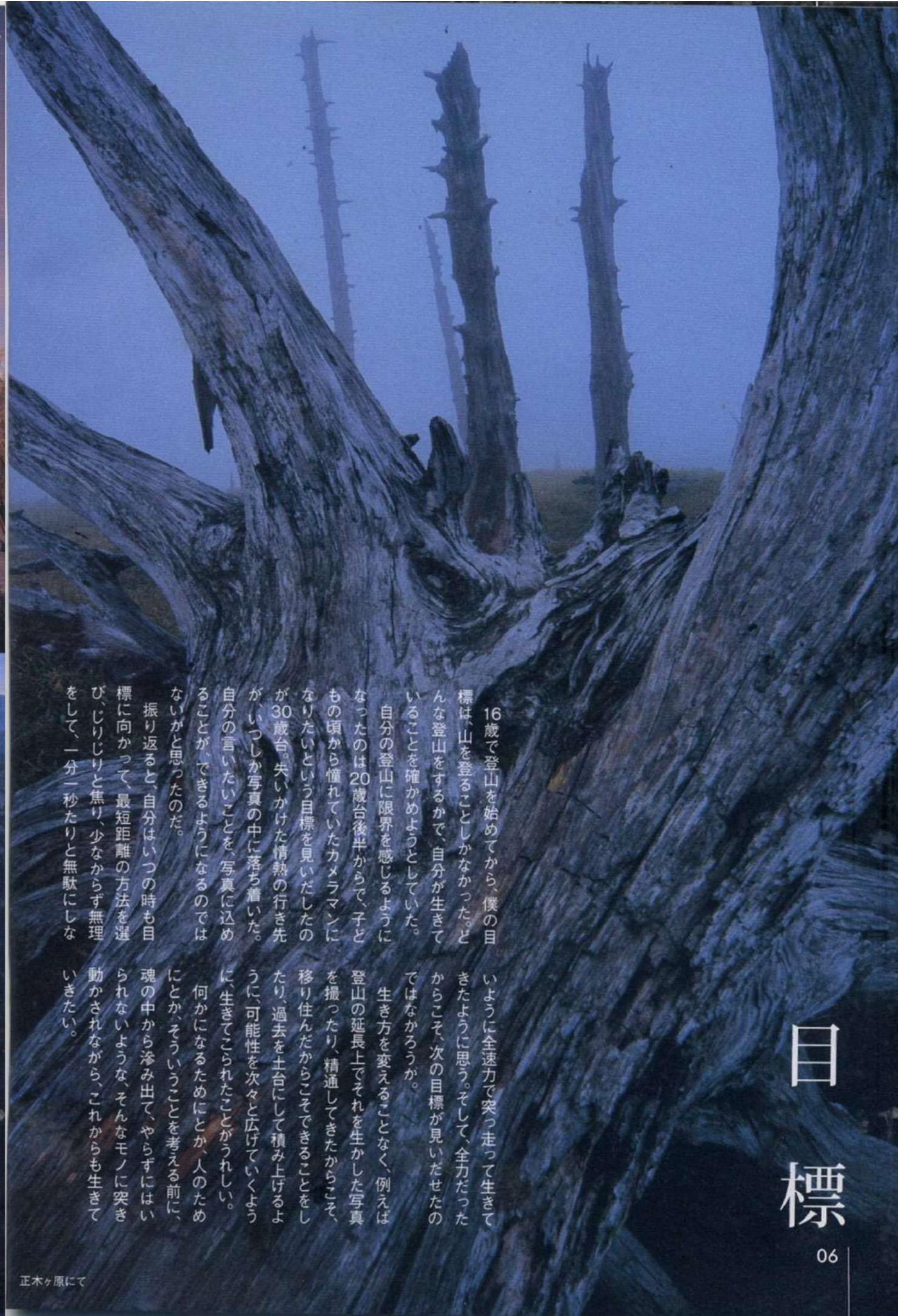
日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、黒部、立山、大台ヶ原、屋久島の10回連載します。



霧氷 朝の日出ヶ岳にて



冬の大蛇ヶ原、大峰山脈に沈む夕日



目標

16歳で登山を始めてから、僕の目標は、山に登ることしかなかった。どんな登山をするかで、自分が生きていくことを確かめようとしていた。自分の登山に限界を感じるようになったのは20歳台後半からで、子どもの頃から憧れていたカメラマンになりたいという目標を見いだしたのが30歳台。失いかけた情熱の行き先が、いつしか写真の中に落ちていった。自分の言いたいことを、写真に込めることができようになるのではないかと思ったのだ。

振り返ると、自分はいつの時も目標に向かって、最短距離の方法を選び、じりじりと焦り、少なからず無理をして、一分一秒たりと無駄にしないように全速力で突っ走って生きてきたように思う。そして、全力だったからこそ、次の目標が見いだせたのではなからうか。

正木ヶ原にて

屋久島 竜王滝

写真・文 志水哲也

島の最高峰・宮之浦岳、永田岳を源にする宮之浦川は流程15キロ、島最大の沢。巨石と大スラブ、大滝が連続する困難な沢登りとなる。中流にかかる竜王滝は島最大落差とされながら、近年まで全容が明らかにされなかった「幻の滝」である。



Profile

志水哲也 (写真家)

1965年横浜市生まれ。1982年から1995年位まで、国内外の単独登攀、長期縦走を行う。1997年に黒部溪谷の玄関口・黒部市宇奈月に移住。2002年頃から写真家としての活動を開始。写真集は「黒部」山と溪谷社刊、「黒部物語」みすず書房刊、「黒部からの言葉」三部作、桂書房刊がある。写真展は「黒部」2002年6月ペンタックスフォーラムを皮切りに、毎年随所で開催している。現在は次のテーマとして屋久島取材している。
http://www3.nsknet.or.jp/~guriguri/

日本の幻ノ滝は知床半島、白神山地、飯豊連峰、奥利根、尾瀬、菅平、黒部、立山、大台ヶ原、屋久島の10回連載。



- 東京/富士フィルムフォトサロン
☎03-6271-3351
2008年8月8日(金)～14日(木)
- 屋久杉自然館・屋久島島内
☎0997-46-3113
2008年11月<予定>
- 大阪/富士フィルムフォトサロン
☎06-6205-8000
2009年1月16日(金)～22日(木)

写真集「屋久島(仮題)」
8月刊行予定
予価 3,500円

写真展
水の島
Water Island
「幻ノ滝」写真家が見た屋久島



苔と水流のイメージ 荒川、淀川



原風景

僕は一つの夢に向かって歩き出した。「常識」のレールから外れ、同級生たちとは別の道を歩いていく。高校三年の春休み、人と群がるのが嫌いだっただけで、修学旅行に行く代わりに、ただただ遠くへ行ってみたいくて、九州を二週間、一人で旅した。

その頃の僕は「夢中になれること」を探していたように思う。将来に対する希望はもてず、勉強にしてみても遊びにしても、すべからく中途半端で、日々を惰性的のように過ごしていた。家庭や学校、社会に対して、疑問や不信を抱きつつも、反発する言葉をもたない歯がゆさ。自分が生きていることを誰かに否定されたとしても、何も言い返せないだろ。現実。何もかも嫌になっしまいそうとき、僕は屋久島と出会った。

霧煙る深い森に突然浮かびあがるヤクスギ、ヤマグルマ、ハリギリの巨木。濡れて朱色にきらめくヒメシヤラ。音もなくゆるゆると豊かに水を流す溪。緑の絨織のような様々な苔類に水粒が滴り光る。そんな鮮やかで、密なる自然と出会うことで、僕のなかの何か呼び覚まされた。

そして、二十六年の歳月を経て、いま僕は被写体としての屋久島を見つめようとして一年のうち二カ月間ほどを島内で過ごしている。誰が見ても姿かたちがよい秀峰よりも、「見さして特徴がない山並みの内包している森や清流の魅力を見つけ、表現していくことに、意味ややり甲斐を感じている。

しかし、あのとき、この島で生まれた感情はいったいどんな言葉で呼ばばいいのだろうか。山への憧れとか、ときめきだけではなくて、その後の人生を変えた何か。いまとなつてははつきり思い出せないが、何かをしたくなつたことだけは確かなのだ。

僕はその原風景を探している。出会えるのだろうか。

(完)